

一八八六年四月九日(金)

聖ラーマクリシユナ、コシポールの別荘でナレンドラはじめ信者たちと

ブツダとタクール、聖ラーマクリシユナ

聖ラーマクリシユナは信者たちとコシポールの別荘にいらつしやる。今日は金曜日。午後五時。チヨイトロ白分五日目。一八八六年四月九日。

ナレンドラ、カーリー、ニランジャン、校長の四人が下の部屋で話をしている。

ニランジャン「(校長に)——ヴィディヤサーガルが新しい学校をつくるそうじゃありませんか？
ナレンドラがそこに勤められるようにすれば……」

ナレンドラ「今さら、ヴィディヤサーガルのところで使われる気はないね！」

ナレンドラはブツダガヤーから帰ってきたばかりである。そこでブツダの像を拝み、その前で深い瞑想に入ったそうである。ブツダ尊者は苦行の末、菩提樹デーヴの下で大覚ニルヴァーナを得られたが、その木のあつたところに新しい菩提樹が再び大きく成長していて、その木も見てきたそうである。

カーリー「一日、ガヤーのウメシユさんのお宅でナレンドラが歌をうたったのですよ——ムリダンガ

ム(画面太鼓)の伴奏で、ケヤルやドウルパダなどを——(訳註、ケヤル、ドウルパダ——共に古典的な歌の様式)

聖ラーマクリシユナは二階の広間で、ベッドに坐っておられた。夕方だった。

モニがひとりでタクールを扇いでいると、ラトウが入ってきて坐った。

聖ラーマクリシユナ「(モニに)——肩衣チャドル一枚と、スリッパを一揃い持って来てくれないか」

モニ「かしこまりました」

聖ラーマクリシユナ「(ラトウに)——肩衣チャドルが十アナ、それからスリッパとで——全部でいくらだ

ね？」

ラトウ「一タカ十アナでございます」

タクールはモニに、値段を書きとめておくようにと手まねで合図をなさった。

ナレンドラが来て坐った。それからラカールとシャシーと、ほか二、三人の信者バクタクが来て坐った。タ

クールはナレンドラに、足を手でさすってくれるようにとおっしゃった。

聖ラーマクリシユナは、手まねでナレンドラにお聞きになる——「何か食べたかい？」

〔ブッダは無神論者か?——有神論と無神論の中間の境涯〕

聖ラーマクリシユナ「(校長に向かって、笑いながら)——(ナレンドラが)あそこ(ブッタガヤ)へ行ってきたんだよ」

校長「(ナレンドラに)——ブッダデーヴァ尊者の教えは、どのようなものですか?」

ナレンドラ「修行の結果、大^さ覚^とた内容、あのかたは口で説明することがお出来にならなかつたのです。そのために、みんなから無神論者だと言われているのですよ」

聖ラーマクリシユナ「(手まねで)——どうして無神論者なんだい？ 無神論者じゃないよ。ただ口で言えなかつただけだ。ブッダ^ッって何だか知っているかい？ 知性そのものに心を集中しつづけて、純粹知性それ自身になった人のことだよ」

ナレンドラ「そうです。それには三階級ありましてね——ブッダ(仏陀)、アルハット(阿羅漢)、ボーディサットヴァ(菩提薩埵)と」

聖ラーマクリシユナ「それもあの御方(神)の遊戯^{あそび}だよ——新しいリーダーだ。

どうしてまた、ブッダが無神論者だなんて言われるんだろうね！ 自我の本性をさとしたところは、^ッアル^ッと^ッナイ^ッとの中間の境地なんだよ」

ナレンドラ「(校長に)——それは相反することが会う(contradictions meet)、という境地です。酸素と水素とで冷たい水ができますが、それと同じ酸素と水素とで酸素溶解器(Oxygen-blowpipe)が出来るんです。その境地になると、^ッ活動^ッと^ッ活動の放棄^ッが同時にできるのです。つまり、無私^{ニシユカ}、無執着^{マカ}の活動です。

世間一般の人たち——五官の対象に引きずりまわされている人たちは、すべてが^ッ有^{アル}と言う。幻象主義の人たちは、すべては^ッ無^{ナイ}という。ブッダの境地は、この^ッアル^ッと^ッナイ^ッを超越したところなのです」

聖ラーマクリシユナ「この、^ッアル^グと^ッナイ^グとは、プラクリティの性質だ。正真の大実在は、^ッアル^グと^ッナイ^グとを離れている」

信者たちはしばらく黙っていた。やがて、タクールがまたお話しになる。

〔ナレンドラとブツダの慈悲と離欲〕

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラに)——それで、ブツダ尊者はどんなお考えなんだね?」

ナレンドラ「神が存在するとかしないとかなうことは、一切ブツダは説かれなかつたのです。しかし、生涯、慈悲を行じられました。タカが小鳥をつかまえて食べようとしているのを見て、その小鳥を助けるために、ブツダはご自分の体の肉をタカにお与えになりました」

タクール、聖ラーマクリシユナは黙っておられる。ナレンドラは、いよいよ熱をこめてブツダの話をつづける——

ナレンドラ「何という完全な離欲^{ウアイラキヤ}でしょう! 王子だったのに、すべてを棄^すててしまった! これといった財産も権力も持っていない人が棄^すてるのとワケが違いますよ!

ブツダは涅槃^{ニガハエーナ}を得てから、いちど家におかえりになりました。そして、妻や息子や他の王族たちに、離欲^{ウアイラキヤ}を行うようにと熱心にすすめました。何という徹底した離欲の精神をお持ちだったことか! しかし一方、ヴィヤーサはどうです——シユカデーヴァが出家しようとするのを止^とめて、こう言ったのですよ、『息子よ! 世間に住んでいて宗教生活をしろ!』と」

タクールは黙っていらつしやる。何もおつしやらぬ。

ナレンドラ「シャクティだのファクティだのいうものは一切、(ブッタは)お認めにならないのです。

——ただ、ニルヴァーナ(涅槃)！ 何という離欲ワライキヤ！ 菩提樹の下で瞑想に入られたとき、こうおつしやいました——『いへいヴア シュツシヤトユ メ シャリーラム』——つまり、『もし、ニルヴァーナが得られぬなら、わが肉体は此処ココに枯死すべし！』——この強固な決心！

肉体こそはすべてのワザワイのもと！——これを支配せずして、いったい何ごとができるか！」

シャシー「でも、君は言ったじゃありませんか。肉を食べるとサットヴァ性が養える——我々は肉を食べなけりゃいけない、と」

ナレンドラ「そりゃ、僕は肉を食べているよ。しかし、米だけ食べていても平気だ——しかも塩抜きで」

少し間をおいて、タクール、聖ラーマクリシュナはブッタ尊者デーヴァのことに関して、手まねでお聞きになった。

聖ラーマクリシュナ「それで何かい、(ブッタ尊者は)髪デカワの束を頭にのつけていなすったかい？」

ナレンドラ「いいえ、数珠玉ルドラークシヤをびっしり集めたような感じの頭でした」

聖ラーマクリシュナ「目は？」

ナレンドラ「目は入三昧の表情です」

〔聖ラーマクリシユナ、アリアリと神を見る——わたしが、ソレ〕

タクールはまた黙っていらつしやる。ナレンドラとほかの信者たちは、タクールの方を凝視している。モニが扇いでいる……と突然、ニコッとお笑いになって、又ナレンドラと話しはじめられた。

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラに向かつて) ところで、と……此処にはいろんなものがあるね？ レンズ豆のスープからヒナ豆、タマリンドの漬物まで——」

ナレンドラ「あなた様の場合は、あらゆる霊的経験をなさった後で、今、たまたま低い場所に住んでいらつしやるのです！」

モニ(内心で独り言)——あらゆる経験を経たあげく、いま、神の信者の境涯に！

聖ラーマクリシユナ「誰かが、低いところに引っぱってくるんだよ！」

こうおつしやると、タクールはモニの手からウチワを受けとられ、また話をおつづけになった。

聖ラーマクリシユナ「このウチワを見ているように、目の前に——じかにアリアリと——わたしは(神を)見たんだよ！ それから見たのは——」

こう話されながら、タクールはご自分の胸に手をあててナレンドラに合図でおつしやる——「わたしの言ったことがわかるかい？」

ナレンドラ「わかります」

聖ラーマクリシユナ「言えるかい？」

ナレンドラ「よく聞きとれませぬ」

聖ラーマクリシユナは、再び手まねで合図なさった——「見たんだよ。あの御方(神)と、わたしの胸のなかにお方は、同じお方だということを——」

ナレンドラ「そうです、そうです。ソーハム、それは我なり」

聖ラーマクリシユナ「けれど、二つを分けるちよつとした線が残っている(信者の私が残っている)——楽しむためにね」

ナレンドラ「(校長に)——偉大な魂は大自在を得たあとも、衆生の解脱を助けるためにこの世に留まって——ある程度の我執のごときものを保って——肉体的な苦楽を味わいながら住んでいらつしやるのですよ。

ちようと、頭に荷物を載せて運搬する人のようなものです。我々は強制的に(on compulsion)働かされているのですが、偉大な魂は自分から喜んで、人の荷物を頭に載せてくださっているのです」

〔聖ラーマクリシユナと師グルの恩寵〕

みんなは再び沈黙した。無辺際の慈悲海であられるタクール、聖ラーマクリシユナは、またお話し下さる——

聖ラーマクリシユナ「(ナレンドラや他の信者に向かって)——屋根は見えているんだよ！ けれど屋根に上がるには、大へんな力がある！」

ナレンドラ「その通りです」

聖ラーマクリシユナ「でも誰かが上がってれば、縄を下ろして下の人を引っ張り上げてやること
ができる」

〔タクール、聖ラーマクリシユナの五つの三昧〕

「リシケシから来たサードゥが、わたしを見てこう言ったよ——ずばらしい！ あなたには三昧の
五種がすべて現れている」と。

時には猿のように——体の樹をサルのように、靈氣がこの枝あの枝と跳び移りながら上がっていっ
て、最後に三昧になるんだ。

時には魚のように——魚が水のなかを、さも楽しそうにスイイ、スイイと泳いでいるような感じで、
靈氣が体のなかを動くうちに三昧になる。

時には鳥のように——体の樹に、靈氣が鳥のように、枝から枝へサツサツと上がっていく。

時にはアリののように——大靈氣スーパースピリットがアリののように、ジリジリと上がってきて、サハスラーラに達する
と三昧になる。

時には蛇のうねりのように——つまり、大靈氣がへビのようにならぬりくねり——最後にサハスラー
ラにいつて三昧になる」

ラカール「(信者たちに向かつて)——もう、やめましょう。ずい分たくさんお話し下すったから——
お体に障さわりますから——」